

山]であるとともに、行動の対象もしくは行動の場として「登られる山」でもある。眺められる富士山はその景観が、登られる富士山はたとえば登山の難易等が問題である。

(1) 自然観光資源

ア 地形・地質 山岳、丘陵、高原、平原、湖沼、河川、谷、滝、海岸、島

イ 天 象 (月見)

ウ 気 象 雪、氷、蟹気楼等

エ 温 泉

オ 生 物 花見、紅葉狩り、魚釣り、はたる狩り等

(2) 文化観光資源

ア 建造物 神社、仏閣、教会、宮殿、城郭、書院、茶室、民家、橋梁(きょうりょう)、庭園等

イ 史 跡 貝塚、古墳、城跡、古戦場、社寺の跡、住居等の遺跡、伝説地等

ウ 美術・工芸・芸能 絵画、書跡、彫刻、工芸品、音楽、舞踊、演劇等

エ 民 俗 生活様式(衣服、食事、住居、信仰、作法、婚姻、娯楽等)、年中行事(祭礼、催物等)、民間芸能(民謡、民踊等)、民芸等

オ 文化的諸施設 博物館、美術館、動物園、植物園、水族館、公園、遊園地、運動場、競技場、教育的諸施設等

カ 産 業

キ 都市・村落 (沢 明)

かんこうしせつ 観光施設 (英)tourist facilities 観光客が

旅行に利用するいっさいの施設。大きく分けて (1) 宿泊施設 (2) 交通機関 (3) 交通施設 (4) 港湾および空港 (5) 運動施設 (6) 慰楽施設 (7) 文化施設等である。観光事業を構成する要素としては、観光客を誘致するための啓蒙紹介をなすものに観光宣伝があり、旅行のスケジュールをたてて旅行のための便宜を提供するものに観光あつ旋があり、旅行の直接の対象物として観光資源があるが、これら3要素を結ぶものに観光施設があるわけである。

1 宿泊施設

わが国の宿泊施設は大別してホテルと旅館とに分れる。単に名称によって二者の区別があるのではなく、施設内容によって区分される。日本ホテル協会の入会条件としてのホテルの定義を示すならば「客室は洋室が主体をなしており、客その他の人が自由に出入できるロビー(lobby)・食堂があり、中央暖房の設備があり、客室には湯水の自由に出せる洗面台があること」となっている。旅館は客室が日本間畳敷が主体をなして、全体の施設として和風構造を主とするものである。日本にはこのホテルと旅館とのほかに、宿泊施設として「山小屋」「海の家」「ユース・ホステル」(youth hostel)等の簡易宿泊施設がある。アメリカにはホテルの分化したものとして、自動車旅行者を対象として、ハイウェイ (highway) か都市・郊外に位置する宿泊施設としてモーター・コートまたはモテル (motor-court or motel) と呼ばれる宿泊施設がある。自動車旅行者が自動車もろとも宿泊することができ、パブリック・スペース(public space)も僅少なところから宿泊料金も低廉で、近時非常な勢いで発達をみているものである。

(1) ホテル 種類としては大別して地域的に分けて市街地ホテルとリゾート・ホテル(resort hotel)に分れる。市街地ホテルはその名の示すとおり交通および商業の中心としての都市にあるものであって、一般観光客のほかに商業上、事務上の旅行者に対するものである。各種の客に対して最大限の便宜を提

供する施設をもち、季節や時間に関係なく常に営業しているものである。社交・集会の中心として、公共的な目的に使用される場合が多い。リゾート・ホテルは各種保養地にあるもので、山のホテル、海浜ホテル、温泉ホテル、ゴルフ・コース・ホテル等、観光地の目的に応じての施設をもつものである。

日本のホテルのはじめとしては慶応3・9東京築地海軍御軍艦操練所跡に、建築費約10万ドルで建築された「ホテル館」をもってはじめとする。これは間口42間、奥行40間延建坪1,200坪、寝室102室を有し、食事付宿泊料1日3ドルであった。

現在日本にあるホテルの数は101、客室総数は522、総収容人員は1,092人である。ホテルの統合団体としては日本ホテル協会があり会員数は92である。宿泊費の平均として1室当り8ドルであるが欧米の平均5ドルに比してはるかに高いとみられている。

ホテル事業の助成を兼ね、外人観光客宿泊のための施設の向上を目的として国際観光ホテル整備法という法律があるが、この法律に施設基準(同法別表1)があつてこの施設の条件を満たすものが、申請によって審査の上国家の登録を受けることになっている。同法による登録ホテル数は67軒(昭和31・12現在)である。

(2) 旅館 わが国における伝統的な宿泊施設であり(古くは官吏の旅行のための「館(やかた)」、庶民の宿泊のための「布施屋(ふせや)」、近世に入り武家のための「本陣」「脇陣」、一般旅行者のための「宿(しゆく)」といった旅館があつた)、世界的にみてもまったく独特な存在で、単に日本人客の宿泊用としてのみでなく、国際観光上外人客にも日本人の生活を知る興味から大いに利用されている。ホテルとの区別としては原則として、畳敷の和風客室が洋風客室よりその数が上回っているとき、すべて旅館とみなされるものである。

ホテルらしい外観と内容、経営形態をそなえておりながら、国際観光ホテル整備法の適用を受けて旅館として登録になったものがあるが、これは旅館が極端にまでホテルの要素をとり入れているか、または旅館が新時代の要求を入れて非常に発達した姿とみることができよう。

全国旅館数は約55,000であつて、旅館の統合団体としては、国際観光旅館連盟、全国旅館組合連合会などがある。

国際観光旅館連盟は外客宿泊可能な水準にある施設を有するものによって組織されていて、外客の要求する客室の機密性や衛生条件等をそなえているものである。全国にある最も優秀な旅館の組織とみることができる。全国旅館組合連合会は都道府県単位の旅館組合をもって構成される連合機関であつて、その事業活動は全国旅館業者共通の利益擁護の立場から、旅館に関する法律・制度等の改善にその活動の主力を注いでいる。

2 陸上交通機関

国際観光の幹線ルートには現在ほとんど国鉄が走行しており、自動車および航空機による観光旅行が漸次増加しつつあつても、あくまで国鉄が主体をなし、近い将来もこの形態は大して変わらないものとみられる。現在営業キロ数は約2万kmわが国鉄道全体の77%を占めている。このうち外人客の利用の最も多いのは東京・神戸間の東海道線である。特急8本、急行およそ40本がこの区間に運転されている。特急は各列車とも1等展望車および外人客に適したリクティニング・シート付の特別2等車が連結されている。東海道線のみならず本州、北海道、九州等他の幹線にも特別2等車は運用されており、またこれらの各線には寝台車、食堂車も連結されている。

外人観光団が来訪する場合、国鉄は1・2等編成の臨時列車